

教育研究業績書

2019年6月22日

氏名 林 幹士 ㊞

教育上の能力に関する事項	年 月 日	概 要
<p>1 教育方法の実践例 保育実習指導において、保育実習での出来事についてのエピソード記述を活用したケースワーク</p> <p>子ども学ゼミにおいて、子育て支援広場「ぽかぽっぽモトロク」でのボランティア参加実習</p>	<p>2016年度より継続中</p> <p>2016年6月15日 (木)・16日 (金)</p>	<p>保育実習指導の講義において、実際に学生が保育実習で経験したエピソードを事例として使用している。これによって、より実践的な課題解決に向き合うことができる。学生が実習において実際に経験するであろう場面でのかかわり方について伝えている。</p> <p>子ども学ゼミでは、乳幼児期のあそびについて学習している。子育て支援広場でのボランティア参加実習によって、実際に子どもとあそぶ機会を設定した。ここでは、母親とのかかわりについても学ぶことができた。</p>
<p>2 作成した教科書、教材 保育原理・障害児保育の講義において、パワーポイントの教材を作成</p>	<p>2015年度より継続中</p>	<p>保育原理・障害児保育の講義において、パワーポイントの教材を作成し、講義を行っている。パワーポイントの教材を作成するにあたり、自身の保育実践に関する映像を積極的に活用した。このことにより、学生が保育実践を身近にかんじることができるように工夫した。テキストのみでは、伝わりにくい部分に関して、よりわかりやすく伝えるための手立てとして用いている。</p>
<p>3 当該教員の教育上の能力に関する大学の評価 学生による授業評価 (2015年度前期)</p> <p>学生による授業評価 (2015年度後期)</p>		<p>2015年度前期に行った講義の授業評価結果について、以下に記述する。本学では、設問回答の4段階を数値として捉えて、累計したものを回答数で割った値が評価として教員に提示される。満点は4.00である。</p> <p>①保育原理 (月1) 3.60 (登録者数83名のうち回答者数73名) ②保育原理 (月2) 3.56 (登録者数75名のうち回答者数73名) ③障害児保育 I (金1) 3.73 (登録者数33名のうち回答者数30名) ④障害児保育 I (金3) 3.43 (登録者数29名のうち回答者数22名)</p> <p>①保育実習指導 IA (月1) 3.44 (登録者数71名のうち回答者数63名) ②保育実習指導 II (月5) 3.51 (登録者数104名のうち回答者数79名) ③子ども学ゼミ A (火1) 3.86 (登録者数19名のうち回答者数16名) ④障害児保育 II (金2) 3.90 (登録者数31名のうち回答者数27名) ⑤障害児保育 II (金4) 3.77 (登録者数26名のうち回答者数26名) ⑥保育実習指導 IA (金3) 3.39 (登録者数74名のうち回答者数62名)</p>

<p>学生による授業評価（2016年度前期）</p>		<p>①保育原理（月3）3.81（登録者数60名のうち回答者数58名）②保育原理（火4）3.72（登録者数57名のうち回答者数50名）③障害児保育Ⅰ（金1）3.38（登録者数29名のうち回答者数26名）④障害児保育Ⅰ（金1）3.28（登録者数32名のうち回答者数27名）⑤障害児保育Ⅰ（金2）3.60（登録者数30名のうち回答者数26名）⑥障害児保育Ⅰ（金2）3.70（登録者数27名のうち回答者数24名）⑦保育原理（金3）3.67（登録者数53名のうち回答者数49名）なお、③④⑤⑥の障害児保育については、2名の教員で担当した。このため同じ授業時間に2クラスの講義の評価がある。</p>
<p>学生による授業評価（2016年度後期）</p>		<p>①子ども学ゼミB（火2）3.67（登録者数17名のうち回答者数14名）②保育実習指導ⅠA（火4）3.36（登録者数87名のうち回答者数76名）③障害児保育Ⅱ（金1）3.46（登録者数30名のうち回答者数28名）④障害児保育Ⅱ（金1）3.25（登録者数32名のうち回答者数30名）⑤障害児保育Ⅱ（金2）3.72（登録者数25名のうち回答者数24名）⑥障害児保育Ⅱ（金2）3.29（登録者数26名のうち回答者数24名）⑦保育実習指導ⅠA（金3）3.68（登録者数75名のうち回答者数60名）なお、③④⑤⑥の障害児保育については、2名の教員で担当した。このため同じ授業時間に2クラスの講義の評価がある。</p>
<p>学生による授業評価（2017年度前期）</p>		<p>①保育原理（月1）3.68（登録者数71名のうち回答者数68名）②保育原理（月2）3.63（登録者数67名のうち回答者数67名）③障害児保育Ⅰ（金1）3.60（登録者数26名のうち回答者数26名）④障害児保育Ⅰ（金1）3.46（登録者数24名のうち回答者数22名）⑤障害児保育Ⅰ（金2）3.56（登録者数26名のうち回答者数24名）⑥障害児保育Ⅰ（金2）3.41（登録者数24名のうち回答者数24名）⑦障害児保育Ⅰ（金3）3.36（登録者数25名のうち回答者数24名）なお、④⑤⑥⑦の障害児保育については、2名の教員で担当した。このため同じ授業時間に2クラスの講義の評価がある。③の障害児保育については、単独での担当であった。</p>
<p>4 その他</p>		
<p>職務上の実績に関する事項</p>	<p>年 月 日</p>	<p>概 要</p>
<p>1 資格 養護学校教諭一種免許状（平18養学一第93号・岡山県教育委員会） 中学校教諭一種免許状（社会、平18中一第663号・岡山県教育委員会） 特別支援学校専修免許状（知的障害者に関する教育の領域・肢体不自由者に関する教育の領域・病弱者に関する教育の領域、平23特支専第1号・岡山県教育委員会）</p>	<p>2007年3月23日 2007年3月23日 2011年6月1日</p>	
<p>2 特許等</p>		
<p>3 その他</p>		

(様式第3号・1ポイント業績記入用紙)				
著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
	①「発達障害のある生徒への教育的支援—本人の思いを汲みとって—」	単著	2009年3月	
②「発達障害のある子どもの保護者に対する支援の動向と実践的課題」	共著	2009年6月	岡山大学大学院教育学研究科研究集録、第141号、1-9.	<p>発達障害に焦点をあて、障害の告知、ストレスの状況、教師による保護者支援の観点から研究動向を整理した。</p> <p>保護者は、比較的早くから障害の疑いを持ち、診断を得るまでの長い期間を苦悩して過ごす場合が多く、子ども自身と子どもをとりまく環境の側面からのストレスにより心理的・身体的に支援を必要としていた。</p> <p>また、教師と保護者との理解が異なる傾向もみられ、問題の要因、背景、経過といった情報を相互から共有していく学校の仕組みづくりの重要性を指摘した。</p> <p>(分担執筆部分) 発達障害のある子どもの親のストレスの実態と支援 (共著者) 吉利宗久・林幹士・大谷育実・来見佳典</p>

<p>③「学童保育所における発達障害のある子どもへの降所支援—応用行動分析の技法を取り入れた飛行機ごっこ遊びを用いて—」（査読付）</p>	<p>単著</p>	<p>2012年5月</p>	<p>日本学童保育学会紀要『学童保育』第2巻、49-57.</p>	<p>本実践研究は、学童保育所において、一時期、降所時刻に降所していくことに困難さを示した発達障害のある子どもへの降所支援を実践の目的とした。また、応用行動分析の技法を取り入れた飛行機ごっこ遊びを用いた降所支援の有効性を検討することを目的とした。</p> <p>結果、対象児は、本実践開始以降、降所時刻に降所していくことができた。また、応用行動分析の技法を取り入れた飛行機ごっこ遊びを用いての降所支援の有効性が認められた。さらに、飛行機ごっこ遊びを降所支援に用いたことで、発達障害のある子どもと他の子どもとの関わりを作り出す素地</p>
<p>④「学童保育における保育者は子ども同士をどのようにつなげようとしているのか？—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた保育者の語り分析から—」（査読付）</p>	<p>単著</p>	<p>2013年12月</p>	<p>日本保育学会『保育学研究』第51巻、第2号、97-108.</p>	<p>本研究の目的は、学童保育における保育者が子ども同士をどのようにつなげようとしているのかを明らかにすることである。インタビューにより得られた15名の保育者の語りを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。</p> <p>結果、保育者は〈遊びを通して〉や〈取り組みを通して〉を含めた日々の保育において、〈承認を媒介として〉・〈相互理解促進支援〉・〈保護者と保護者をつなぐ〉ことで、子ども同士をつなげようとしていた。保育者は、これらの行為を往還的・複合的に繰り返し実践していくことで子ども同士をつなげようとしていたことが</p>

<p>⑤「つながる先をつくることの意義—鉄道サークルの学童保育実践を通して—」</p>	<p>単著</p>	<p>2015年3月</p>	<p>夙川学院短期大学 研究紀要第42号、 31-44.</p>	<p>本研究では、つながる先としての鉄道サークルの学童保育実践をエピソードとして記述することと、記述したエピソードからつながる先をつくることの意義について検討していくことを目的とする。</p> <p>エピソードの考察をふまえ、つながる先をつくることの意義について五つをあげる。一つ目の意義としては、自らの力で他者とつながることが苦手な子どもを、つながりやすくすることである。二つ目の意義としては、保育の場に楽しそうな雰囲気を生み出すことである。三つ目の意義としては、子どもに楽しみを与えていることである。四つ目の意義としては、友達と一緒にあそぶことの楽しさに気付けることである。五つ目の意義としては、あそびの選択肢がふえ</p>
<p>⑥保育実習で学生が子どもとのかかわりでうまくいかなかったことは何か：保育実習IAにおけるエピソード記述の分析から</p>	<p>共著</p>	<p>2016年3月</p>	<p>夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第10号、70-80.</p>	<p>本研究の目的は、保育実習で学生が子どもとのかかわりでうまくいかなかったことは何かを、具体的に明らかにすることである。エピソード記述による研究方法を用いた。エピソードを分類し、エピソードのまとまりをカテゴリーとした。結果、「コミュニケーションの取り方」、「けんかの仲裁」、「注意を必要とする場面での対応」、「あそびの調整」、「実習生の取り合いになったときの対応」、「人見知りをする子どもとのかかわり」、「着替え場面での対応」、「障がいのある（あるかもしれない）子どもとのかかわり」、「ママがいいと泣く子どもへのかかわり」、「子どもの行動の意味を理解すること」、「子どもに注目してもらうこと」、「無理な要求への対応」、「その他」、の13カテゴリーに分類された。</p> <p>(共同研究につき本人担当部分の抽出不可能)</p>

<p>⑦発達障がいのある子どもの保護者が学童保育実践に求める支援の検討—保護者の語りから— (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2018年5月</p>	<p>日本学童保育学会 紀要『学童保育』 第8巻、75—86.</p>	<p>本研究の目的は、保護者の語りから発達障がいのある子どもの保護者が、学童保育実践に求める支援について検討することである。結果、12のカテゴリーを、4つの支援の観点に整理した。観点1「子どもの状況に応じたきめ細やかな支援」、観点2「様々な体験の機会があり、できることがふえるような支援」、観点3「子ども同士が生活を通して共に成長できるような支援」、観点4「保護者の意向を把握したうえでの保護者支援」、であった。発達障がいのある子どもの保護者が学童保育実践に求める支援について、4つの支援の観点におけるカテゴリーごとに、本研究で検討した具体的な方法を示した。 (共同研究につき本人担当部分の抽出不可能) (共著者)</p>
---	-----------	----------------	---	---

活動（学内管理・運営、地域・社会）の記録

2019年6月22日

氏名 林 幹士 ㊟

学内管理・運営活動	期 間	概 要
保育・教職課程委員会委員長	2016年6月～現在に至る	保育・教職課程委員会委員長として、保育実習・教育実習の管理・運営を担っている。
地域・社会活動	期 間	概 要
①第8回愛媛学童保育講座における分科会の講師	2013年5月19日	「発達障がいの子とも向き合うためには？」というテーマのもと、愛媛県学童保育講座において分科会の講師を務めた。ここでは、約70名の学童保育保育者を中心とした受講生に対して、自身の実践を交えながら、3時間の講義を行った。 発達障がいのある子どもへの個別支援における具体例を紹介した。また、仲間のなかで発達障がいのある子どもを、いかに育ていくのかについて自身の実践事例をもとに話をした。
②平成25年度岡山県放課後子どもプラン合同研修会における分科会の講師	2013年7月14日	「障がいのある子どもと放課後児童クラブ」というテーマのもと、岡山県放課後子どもプラン合同研修会において分科会の講師を務めた。ここでは、約70名の学童保育保育者を中心とした受講生に対して、2時間の講義を行った。 自閉症のある子どもについて理解してもらうための前提として、他者理解の重要性について指摘した。他者理解をするにあたり、関係論的視点で他者理解をすることの視点を示した。そして、自閉症のある子どもが、どのように意味を獲得していくのかという観点を中心に、保育のうえで有用な視点を示した。
③④⑤日本放課後児童指導員協会の実施する講習会科目「特別なニーズをもつ子ども」の講師	2013年11月3日（三重県会場）・12月1日（徳島県会場）・12月8日（滋賀県会場）	放課後児童指導員資格取得のために、日本放課後児童指導員協会が実施する講習会（90分×4コマ）において講師を務めた。ここでは、日本放課後児童指導員協会作成のテキストを用いて、障がいのある児童の特性や特性をふまえた対応について、保育の事例を用いながら解説した。また、グループワークやロールプレイを取り入れて、受講者の学びがより深まるようにこころがけた。
⑥平成25年度備中子どもサポーター育成講座 第6回 8. 実践論（発達障がい児と周囲への配慮）講演会の講師	2013年11月12日	「発達障がい児と周囲への配慮」というテーマのもと、備中子どもサポーター育成講座において講師を務めた。ここでは、約100名の受講者に対して、2時間の講義を行った。 発達障がいのある子どもと周囲の児童が、いかにかわりあひながら、それぞれが育っていくのかを、日々の保育実践事例を用いて話を進めた。また、発達障がいのある児童をもつ保護者支援において、重要な視点について示した。

⑦2014年度岡山市学童保育連絡協議会指導員研修会の講師	2014年6月4日	<p>「しょうがいのある子への理解と支援」というテーマで、岡山市の放課後児童支援員約50名を対象に講義を行った。</p> <p>まずは、発達障がいについての基礎的な解説を行った。これをふまえて、発達障がいのある人への支援の原則について示した。</p> <p>発達障がいのある子どもが、いかに生活世界を築いていくのかという視点を提示した。そして、この視点をもとに、いかに保育実践を進めていくのかについてである。ここでは、筆者が実践した保育実践をもとに、発達障がいのある子どもを仲間とともに育ていくことの重要性について指摘した。</p>
⑧学童保育指導員学校（四国会場）における分科会の講師	2014年6月29日	<p>全国学童保育連絡協議会の主催する指導員学校（四国会場）において、分科会の講師を務めた。分科会のテーマは「安心できる学童保育の生活づくり」である。</p> <p>安心をキーワードに、学童保育の保育者に求められるものについて話をした。そして、学童保育所において安心のある生活を送るために必要なものやことについて、子どもからのインタビューをもとに示した。</p> <p>また、生活づくりのなかで大きなウェイトを占める、あそびをいかに展開していくのかを示した。これについては、自身の保育実践事例をあげながら解説した。</p>
⑨平成26年度備中子どもサポーター育成講座第4回、6.子どもの人間関係において講演会の講師	2014年9月17日	<p>「子どもの人間関係」というテーマのもと、約150名の受講者に対して、2時間の講義を行った。ここでは、子どもの生活世界がいかにしてできあがっていくのか。また、子どもの人間関係をいかにしてつくるのか。実践事例を通して話をした。子どもの人間関係をつくるためには、学童保育所において安心して生活することが必要となる。このための条件について、子どもからの聴き取り調査をもとに示した。</p>
⑩⑪日本放課後児童指導員協会の実施する講習会科目「特別なニーズをもつ子ども」の講師	2014年9月21日（岐阜県会場）・11月23日（石川県会場）	<p>放課後児童指導員資格取得のために、日本放課後児童指導員協会が実施する講習会（90分×4コマ）において講師を務めた。ここでは、日本放課後児童指導員協会作成のテキストを用いて、障がいのある児童の特性や特性をふまえた対応について、保育の事例を用いながら解説した。また、グループワークやロールプレイを取り入れて、受講者の学びがより深まるようにこころがけた。</p>
⑫平成26年度 備中子どもサポーター育成講座 第6回、8. 変容する家族において講演会の講師	2014年11月19日	<p>「変容する家族」というテーマのもと、約150名の受講者に対して、2時間の講義を行った。ここでは、他者理解についての視点を示した。他者理解の難しさを指摘し、他者を理解しようとする姿勢の重要性についてふれた。また、発達障がいのある子どもの保護者に対する支援の動向と実践的課題について整理した。そして、保護者支援における有用な視点について示した。</p>
⑬兵庫県立西宮甲山高等学校において、「あそびを通して、子どもが育つ」というテーマで講師を務めた。	2015年10月22日	<p>保育者を目指す高校生約30名に対して、講義（50分×2コマ）を行った。まずは、あそびの概要について解説した。あそびにおいて子ども同士が育っていく。この観点からあそびの重要性について指摘した。</p> <p>また、実際にあそびを体験してもらった実践を行った。ここでは、あそびを体験することで、あそびそのものの楽しさに気付いてもらうこと。そして、あそびを保育者として、いかに展開していくのかやいかにアレンジしていくのか、について実践をしながら解説した。</p>

<p>⑭平成27年度奈良県放課後児童支援員研修会の講師</p>	<p>2016年1月17日</p>	<p>奈良県の放課後児童支援員、約100名に対して講義（90分×4コマ）を行った。講義のテーマは「児童期（6歳から12歳）の生活と発達・特に配慮を必要とする子どもの理解、障害のある子どもの理解、障害のある子どもの育成支援」についてである。</p> <p>ここでは、児童期の子どもの発達について解説を行った。これをふまえて、障がいのある子どもの発達について示した。そして、障がいのある子どもの特性をふまえた、支援方法について示した。とりわけ、発達障がいのある子どもの保育実践事例をもとに、実践の展開方法について示した。</p> <p>発達障がいのある子どもの保護者支援については、保護者の語りから、保護者支援におけるヒントを提示した。</p> <p>また児童虐待に関して厚生労働省のデータから、死亡事例数について提示した。児童虐待を受けている子どもへの支援の重要性について強調した。</p>
<p>⑮第8回「兵庫の保育を考える会」分散会⑥発達障がいのある子どもの保育と保護者支援の講師</p>	<p>2016年3月13日（日）</p>	<p>兵庫県の保育士約70名を対象に、岡山市公立保育所小西淳子園長と共に分散会の講師を担当した。</p> <p>発達障がいの特性について解説した。また発達障がいのある子どもに気づくためのポイントについて提示した。これらをふまえたうえで、発達障がいのある子どもが仲間とともに育つための手立てについて言及した。</p> <p>発達障がいのある子どもの保護者支援で大切なことでは、発達障がいのある子どもの保護者の語りから保護者の望む支援について紹介した。</p>
<p>⑯学童保育指導員学校（西日本会場）における分科会の講師</p>	<p>2016年6月5日（日）</p>	<p>放課後児童支援員約50名を対象に「障がいのある子どもも含めた生活づくり」をテーマに講師を務めた。ここでは、障がいのある子どもの学童保育の生活における特性について解説した。また、子どもが学童保育で生活するために必要なものやことについて伝えた。</p> <p>後半には、放課後児童支援員である白木多佳子（矢田南学童保育所）さんの実践報告「広汎性発達障がいのあるゆうた君と周辺の子どもの課題」を題材に、事例検討を行った。ここでは、ゆうたくんへの支援のポイントについて説明した。</p>
<p>⑰兵庫県立西宮甲山高等学校において、「あそびを通して、子どもが育つ」というテーマで講師を務めた。</p>	<p>2016年10月20（木）</p>	<p>保育者を目指す高校生約30名に対して、講義（50分×2コマ）を行った。まずは、あそびの概要について解説した。あそびにおいて子ども同士が育っていく。この観点からあそびの重要性について指摘した。</p> <p>また、実際にあそびを体験してもらう実践を行った。ここでは、あそびを体験することで、あそびそのものの楽しさに気付いてもらうこと。そして、あそびを保育者として、いかに展開していくのかやいかにアレンジしていくのか、について実践をしながら解説した。</p>

<p>⑱平成28年度徳島県放課後児童支援員認定講習会の講師</p>	<p>2016年11月6日（日）</p>	<p>本講習会は、厚生労働省のガイドラインに基づき、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）に従事する放課後児童支援員として必要な知識・技能を補完するため、業務を遂行する上で必要最低限の知識・技能の習得とそれを実践する際の基本的な考え方や心得を認識してもらうことを目的として実施するものである。ここでは、「2-⑥：障害のある子どもの理解」「2-⑦特に配慮を必要とする子どもの理解」「3-⑩：障害のある子どもの育成支援」の講義について担当した。</p>
<p>⑲⑳平成28年度滋賀県放課後児童支援員認定講習会の講師</p>	<p>2016年11月19日（土）・30日（水）</p>	<p>本講習会は、厚生労働省のガイドラインに基づき、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）に従事する放課後児童支援員として必要な知識・技能を補完するため、業務を遂行する上で必要最低限の知識・技能の習得とそれを実践する際の基本的な考え方や心得を認識してもらうことを目的として実施するものである。ここでは、「2-⑥：障害のある子どもの理解」「3-⑩：障害のある子どもの育成支援」の講義について担当した。</p>
<p>㉑㉒平成28年度奈良県放課後児童支援員認定講習会の講師</p>	<p>2016年12月4日（日）・23日（金）</p>	<p>本講習会は、厚生労働省のガイドラインに基づき、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）に従事する放課後児童支援員として必要な知識・技能を補完するため、業務を遂行する上で必要最低限の知識・技能の習得とそれを実践する際の基本的な考え方や心得を認識してもらうことを目的として実施するものである。</p> <p>12月4日には、「2-⑥：障害のある子どもの理解」「3-⑩：障害のある子どもの育成支援」の講義について担当した。</p> <p>12月23日は、「2-⑤児童期（6歳～12歳）の生活と発達」「2-⑥：障害のある子どもの理解」「2-⑦特に配慮を必要とする子どもの理解」「3-⑩：障害のある子どもの育成支援」の講義について担当した。</p>
<p>㉓学童保育指導員学校（西日本会場）における分科会「15、障がいのある子どもを含む生活づくり」の講師</p>	<p>2017年6月4日（日）</p>	<p>放課後児童支援員約70名を対象に「障がいのある子どもも含む生活づくり」をテーマに講師を務めた。ここでは、障がいのある子どもを支援する方法論としてカンファレンスの重要性について説明した。</p> <p>後半には、放課後児童支援員である白木多佳子（矢田南学童保育所）さんの実践報告「北本まなみちゃんと周辺の子どもが楽しく過ごすために」を題材に、事例検討を行った。事例検討の際には、カンファレンスのポイントをふまえながら、実際の支援のありかたについて説明した。</p>
<p>㉔兵庫県立西宮甲山高等学校において、「あそびを通して、子どもが育つ」というテーマで講師を務めた。</p>	<p>2017年9月21日（木）</p>	<p>保育者を目指す高校生約30名に対して、講義（50分×2コマ）を行った。まずは、乳幼児期の終わりまでに育てたい10の姿を確認した。そして、この10の姿をあそびを通して育てることの重要性について解説した。あそびにおいて子ども同士が育っていく。</p> <p>また、実際にあそびを体験してもらう実践を行った。ここでは、あそびを体験することで、あそびそのものの楽しさに気付いてもらうこと。そして、あそびを保育者として、いかに展開していくのかやいかにアレンジしていくのか、について実践をしながら解説した。</p>

<p>②⑤⑥平成29年度奈良県放課後児童支援員認定講習会の講師</p>	<p>2017年11月5日（日）・12月10日（日）</p>	<p>本講習会は、厚生労働省のガイドラインに基づき、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）に従事する放課後児童支援員として必要な知識・技能を補完するため、業務を遂行する上で必要最低限の知識・技能の習得とそれを実践する際の基本的な考え方や心得を認識してもらうことを目的として実施するものである。 ここでは、「2-⑥：障害のある子どもの理解」「3-⑩：障害のある子どもの育成支援」の講義について担当した。</p>
<p>②⑦⑧平成29年度滋賀県放課後児童支援員認定講習会の講師</p>	<p>2017年11月19日（日）・12月23日（土）</p>	<p>本講習会は、厚生労働省のガイドラインに基づき、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）に従事する放課後児童支援員として必要な知識・技能を補完するため、業務を遂行する上で必要最低限の知識・技能の習得とそれを実践する際の基本的な考え方や心得を認識してもらうことを目的として実施するものである。 ここでは、「2-⑤児童期（6歳～12歳）の生活と発達」「2-⑥：障害のある子どもの理解」「2-⑦特に配慮を必要とする子どもの理解」「3-⑩：障害のある子どもの育成支援」の講義について担当した。</p>
<p>②⑨岡山市学童保育連絡協議会指導員部会2018年度学童保育指導員研修会の講師</p>	<p>2018年6月7日（木）</p>	<p>ここでは、「しょうがいのある子への理解と支援—①発達しょうがいの基礎—」をテーマに、岡山市学童保育の保育者60名に研修会を実施した。 発達障がいの特性を整理して、提示した。発達障がいのある子どもが仲間と共に育つ姿について、保育実践事例を紹介した。 また、発達障がいのある子どもの保護者の語りから、保護者が学童保育実践に求める支援について伝えた。発達障がいのある子どもを支援する方法論として、カンファレンスの重要性について言及した。</p>
<p>③⑩平成30年度岡山県放課後児童支援員認定講習会の講師</p>	<p>2018年9月24日（月）</p>	<p>本講習会は、厚生労働省のガイドラインに基づき、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）に従事する放課後児童支援員として必要な知識・技能を補完するため、業務を遂行する上で必要最低限の知識・技能の習得とそれを実践する際の基本的な考え方や心得を認識してもらうことを目的として実施するものである。 ここでは、「2-⑤児童期（6歳～12歳）の生活と発達」「2-⑥：障害のある子どもの理解」「2-⑦特に配慮を必要とする子どもの理解」「3-⑩：障害のある子どもの育成支援」の講義について担当した。</p>